

この本で学習するみなさんへ

「読むこと」と「理解すること」は同じではありません。文章を音読できても、内容を理解できているとは限らない。では、どうすれば文章を正しく理解できるのか。

『予習シリーズ6年④国語』は「文章を読んで正しく理解する力（読解力）」を身につけるための「教科書」です。「問題集」ではないので、問題を解いて、答え合わせをしておしまい、にしないように気をつけてください。正しく使って、あなたにとって一生の財産ともなる「読解力」の土台をしっかり築きましょう。

1 1週間の学習計画

各回が、一週間の学習範囲になっています。「むりなく、むらなく・むだなく」学習するためには、計画が大切です。自分にあった学習計画を立てましょう。

2 各回の構成と学習方法

今回の文章テーマ

物語・小説なら「友人や親との対立」、説明文・論説文なら「科学技術の進歩や弊害」といった、中学入試によく

ます。

Q & A

「文章を正しく読解するには〇〇が大切だ」とは書いてあるが、そもそもどうしてそれは大切なのだろう……。ふだん、気になっていても、聞く機会がありません。そのような「素朴な疑問」を中心に、さまざまな疑問について考えることで、国語の学習への関心を深めていきましょう。

●基本問題・発展問題・ことばの学習

問題を解くことで、各回の読解テーマ（学習課題）の確認を中心とした文章読解の学習を進めます。問題形式になっていますが、テストではありませんので、正答を出すことが目的ではありません。答えが合っても、なぜそれが正解なのかを説明できなければ、意味はありません。正答でも誤答でも、どのように考えてその答えを出したのか、特に誤答の場合はどこに間違いがあったのか、ということをチェックすることで、読解力が養われます。誤答を恐れず、むしろ、誤答が多いほど、学ぶことも多くなると考えて取り組むことが、読解力向上につながります。

「ことばの学習」では、文章読解の基礎となる日本語のきまりや使い方を学びます。和語や慣用語、ことわざなどの知識は、副教材『漢字とことば』を使って覚えましょう。

出題される文章テーマについて学びます。初めて読む文章であっても、「こういうテーマの文章を以前、読んだことがある」という経験があれば、理解のハードルが下がります。もちろん、同じテーマについて書かれた文章でも、作品そのものは別物ですから、細かい内容や展開は当然異なります。「友だちとけんか」↓「仲直り」を描いた作品はたくさんありますが、同じように「けんか」の話でも、もしかしたら「対立が深まる」という展開を見せるかもしれません。「読んだことがある」⇨「全部わかった」という思い込みは禁物です。

📖 くわしく知る

各回の文章テーマについて、理解を深めましょう。小学生にはなじみのないことばかりですが、だからこそ、「聞いたことがある」レベルから、もう一歩踏み込んで、「おおよそ、こういうことだ」という程度に「予習」しておくことで、難しい文章理解の負担が軽くなることが期待できます。正確な知識を詰めこむことが目的ではありませんので、説明を暗記する必要はありません。そのかわり、しっかりと読んで、頭の中に文章内容を理解するための「土台」を築きましょう。

💡 今回のまとめ

読解テーマ（学習課題）についてのポイントを再確認し

●解答と解説

問題を解き終えて、いきなり「解説」を読むと理解できなくなってしまうことがあります。読む前に自分が答えを出した過程（設問をどのように理解し、文章をどのように読んで、答えに至ったのか）を確認しておくことが必要です。

3 総合回

5回に1回程度、復習のための「総合回」があります。前に学習したことを忘れてしまっている場合は、その回にもどって読み直しましょう。

4 副教材の活用

●漢字とことば

漢字とことば（語彙）に関する学習をまとめた必修教材です。定着するまで何度でもくり返して学習しましょう。

●演習問題集

予習シリーズの読解テーマ（学習課題）に対応した、文章読解の問題集です。

●最難関問題集

最難関校の受験を見据えた、記述問題中心の問題集です。

第15回

詩・短歌・俳句 詩・短歌・俳句
単語の学習①―助動詞の総復習

210 199

第14回

総合

186

第13回

説明文・論説文(4) 人間と社会
因果関係②―(因果関係)の文脈―

184 173

第12回

説明文・論説文(3) 暮らしとテクノロジー
因果関係①―順接・理由説明―

171 160

第11回

物語・小説(4) 家族と友人
対比の関係②

158 144

第5回

総合

63

第4回

説明文・論説文(2) 科学と文明
細部の文脈②―接続関係―

61 50

第3回

説明文・論説文(1) 自然と環境
細部の文脈①―指示語―

48 38

第2回

物語・小説(2) 個性と葛藤
一文を正確に読む②

36 22

第1回

物語・小説(1) 出会いと別れ
一文を正確に読む①

20 6

第18回

総合

239

第17回

敬語 物語・小説(5) 生と死

237 224

第16回

説明文・論説文(5) 日本語と私
単語の学習②―助詞の総復習

222 212

第10回

随筆文(3) 記憶と人生
対比の関係①

142 132

第9回

総合

119

第8回

物語・小説(3) 挫折と再生
イコールの関係③―比喩―

117 103

第7回

随筆文(2) 言葉と生活
イコールの関係②―換言―

101 90

第6回

随筆文(1) 日本と世界
イコールの関係①―抽象と具体―

88 76

〔付録〕

第1回合不合判定テスト練習問題
第2回合不合判定テスト練習問題

264 254

第 8 回

物語・小説(3)

イコールの関係③ — 比喩 —

今回の読解テーマ

挫折と再生

挫折

「挫折」とは？

自分が成し遂げようとしたことが、途中であきらめざるを得なくなる。また、そのために気力ややる気が失われてしまうこと。



「挫折」から連想する言葉を3つ以上挙げなさい。



くわしく知る

挫折したことがありますか

「どうしても医大に合格することができず、医者になるという幼い頃

からの夢をあきらめた」と聞けば、「挫折」という言葉が思い浮かびます。長い人生、最初から最後まで順風満帆、というわけにはいきません。「挫折」という苦い経験の一つや二つを持つ人はたくさんいます。

挫折の基準

「小学校に6年間、無遅刻無欠席で通い続ける」という目標が途切れたら、それは挫折でしょうか。他人から見れば「挫折」というほどのことではないだろうと思えることでも、当の本人には重大な意味を持つことかもしれません。「挫折」とは極めて個人的な経験です。

挫折がもたらすもの

夢や希望は美しい。けれども、それらのすべてが思ったとおりに実現するわけではありません。さまざまな原因によって、目標達成を断念することは珍しいことではありません。夢の実現に向けてどれほど期待に胸ふくらませて、どれほど努力をしたのか。挫折のダメージは、期待の大きさと努力の度合いと比例します。

挫折の原因

努力や準備の不足で挫折したのなら、自分の責任です。だからあきらめがつくかもしれませんが、病気や事故など、自分の力ではどうにもならない不運によって夢をあきらめざるを得なくなったら、未練が残ります。次の目標に向けた再出発の妨げとなり、立ち直るまでに時間を要することになるかもしれません。

まとめ

挫折は人を強くする

挫折を乗り越え、一回り大きくなった人の物語を読むと、勇気づけられます。ところで、挫折を経験すれば、誰でも強くなるのでしょうか。目指していたものが大きければ大きいほど、挫折のショックも大きい。乗り越えることは容易ではありません。だからこそ、人は挫折から立ち直った人の物語に心を引かれるのかもしれない。



再生

「再生」とは？

死にかけていたものが再び生きる力を取りもどすこと。滅びかけていたものがよみがえること。

「再生」から連想する言葉を3つ以上挙げなさい。

くわしく知る

挫折と物語

「再生」は「再び生きる(生き返る)」の他に、「絶望のどん底から這い上がる」「挫折から立ち直る」といった精神的な復活という意味があり、文学作品のテーマとして頻繁に取り上げられます。挫折のダメージから立ち直るのは容易ではありません。すがりような思いで読んだ物語に勇気づけられ、立ち上がる気力を取り戻せた人は幸せだと言えるでしょう。

時には愛のムチ

挫折した人が絶望のどん底から這い上がるきっかけとして、周囲の支

時には静かに寄り添う

えが大きな役割を果たします。優しく、温かく励まし、時にはピンタで泣き言を吹き飛ばす。物語と同様に、家族や友人、恋人、先輩等々、身近な人の愛もまた、心の傷に最もよく効く定番の治療薬です。

挫折して生まれ変わる

落ちこんでいる人に向かって「そんなものは挫折に入らない」と笑い飛ばすのはあまりに乱暴です。挫折から立ち直ることを「再(び)生(ま)

Q

テストの時は文章を最後まで読んでから問題を解くの？ それとも、文章を読みながら、解いていくの？

A

公式な決まりはないので、ご自由に。ただ、実際はテストの形式や文章、設問のボリューム、試験時間によって、ケースバイケースで判断することになるでしょう。「文章が長くて、設問も多い」というテストでは、文章を読み終えてから、改めて設問に取りかかる、というのでは、時間が足りなくなる恐れがあります。この場合、空欄補充や言葉の意味を答える問題など「文章全体の理解を必要としない設問」については、読みながら答えを出して、文章全体、あるいは広い範囲の読み取りを必要とする問題は、全文を読んだからじっくりと取り組むという手順を進めると、試験時間を有効に活用できます。「代入して記述問題で、問題数は少ない」という形式であれば、一筋縄ではいかない、深い読み取りが必要な問いばかりである可能性を考えて、全文を読んで、全体の概要を頭に入れてから、解き始めるほうが口元は少なくなります。同じ「国語のテスト」でも、中身や形式はさまざまです。「読んでから」「読みながら」のどちらかに決めてかかるのは賢いやり方ではなさそうです。

まとめ

物語の力

人はいつ絶望のどん底に突き落とされるか、わかりません。だからこそ、物語は「あきらめるな」「死んではいけない」とメッセージを送り続けます。挫折した人を助けてくれるのは、家族や友人、恋人、先輩だけではありません。



基本問題

◆次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

東京の学校でいじめにあい登校できなくなった小学五年生の雪乃(ゆきの)は、父(航介)とともに曾祖父(そうそふ)父母(ふぼ)「茂三・ヨシ江」が住む長野で暮らし始めますが、ここでも学校には通えず、曾祖父父母の農作業や父が民家を改造して始めた『納屋カフェ』を手伝っています。

雪乃が湯呑みと小皿と割り箸を盆にのせて片付け、カウンターの流しに運ぶと、かわりに大輝がふきんを絞り、テーブルを拭きに立った。

水を張ったボウルに湯呑みと小皿を浸けた雪乃は、急いで大輝のところにへ行った。二人きりで話せるのは今だけだ。

入口側の窓ガラス越し、父親たちがまだ外の駐車場にいるのを確かめてから、

「ねえ」

声をかけると、大輝は「ん？」と顔を上げた。

「あのお。みんな、ほんとは迷惑してると思うんだよね」

濃い眉が寄る。

「みんなって？」

「だから、大ちゃん以外のみんな。毎日、わざわざ遠回りして、うちらなんか寄ってさ。べつに、来たからって楽しいことなんか何にもないでしょうよ。……ほんとはもっと他の友だちと遊んだりしたいのに、」

シ江の手前、それを隠すのに苦労する。

「迷惑だとかなんだか、どうでもいいことに気にすんなよ」

テーブルを拭き終えた大輝は、何かしていないと手持ち無沙汰なのか、続いて『納屋カフェ』の象徴とも言える分厚い一枚板のカウンターを拭き始めた。

「あいつらの誰も、無理なんかしてないし。来たいから来てるってだけでさ。俺なんて、強引どころか、もういちいち誘ってもないよ。誘わなくてもみんな、学校終わったらふつうに雪っぺんちへ行く気してるもん」

「だから、なんで？」

「全然わかんないよ。うちなんか来て何が楽しいんだろ」

「じゃあさ、雪っぺは全然楽しくないわけ？」

さすがにちよつと苛立った様子で、大輝が言う。

「俺らが行くのが邪魔だったりすんの？」

そう訊かれると、言葉に詰まってしまう。

邪魔なんかじゃない。最初のうちこそお節介が鬱陶しく思えたりもしたけれど、それは同情されるのがいやだったからだ。でも、大輝以外の男子二人があまりにもこちらに気を遣わないのと、詩織のおっとりとした性格にほだされたのとで、今では一緒に過ごす時間が少しも苦ではない。はつきり言って、楽しいとも思わない。

けれど、楽しいと感じることこそ不安なのだ。大輝にはきっとわからない。

「雪っぺがどうしてもいやだっていうなら、行くのやめるけどさ」

「いやじゃないよ！」

思わず大きな声が出た。

「いやじゃ、ないけど……」

言い出せないだけなんじゃないの？ 大ちゃんが強引に誘うから」

「そんなことはないよ。ほんとにつまんなかったら来るわけじゃない」と、大輝が口を尖らせる。「それに、モチオにメシだってやらなきゃなんないしさ」

「だったら、うちに寄らなくなつて祠へ直接行けばいいじゃない」

あの猫にみんなど名前を付けたのは、祠に通うようになって三日目のことだ、白いから(ユキ)にしよう、という賢人の主張に対して、それだと雪乃ちゃんとかぶっちゃうからダメ、と詩織が言い、じゃあどうするよ、シロじゃあありきたりだし、モチモチしてるから(モチオ)でいいか、というわけでその名前に落ちついたのだ。

忘れもしない。詩織から(島谷さん)ではなく(雪乃ちゃん)と呼ばれたのは、あの時が初めてだった。どきん、とした。

もちろん詩織はその後で、慌てたように謝った。

「あ、ごめんね、勝手に。でも、いやじゃなかったら、これからそう呼んでもいい？ あたしのことも下の名前で呼んでくれていいから」

別になんか呼ばなかったから頷いたけれど、雪乃のほうは、なかなかすぐに(詩織ちゃん)とは呼ばなかった。かといって今さら(中村さん)と呼ぶのもなんというか、そう、角が立つ気がして、結局まだ一度も名前を呼んでいないのだが、そばにいない時に思い浮かべる彼女のことはすでに、雪乃の中でも(詩織ちゃん)になっている。

不思議だ。名前の呼び方ひとつで、人と人の距離がこんなにも変わるものだなんて。そうして考えてみると、大輝が

正直なところ、二週間たった今ではもう、彼ら四人が来てくれるのをどこかで心待ちにしてしまっている。畑や果樹園を手伝っていて、学校が終わるくらいに時間になると少しそわそわしてきて、茂三やヨ

「だったらいいじゃん。雪っぺ、そういうとこ、英子おばさんに似てるよな」

「そういうとこって？」

「なんか、考え過ぎちゃうとこ。頭いい人はしょうがないのかなあ。楽しいかどうかなんて、いちいち考えるからわかんなくなるんだよ」

雪乃は地団駄を踏みたくなった。

「考えないでどうやったらわかるのよ！」

大輝は「2」カウンターのの中に入り、ふきんを洗った。きつく絞り、タオル掛けに干しながら言った。

「たぶん、あれだよ。『バイバイ、また明日な』って手振る時、その明日が早く来ればいいのにな、って思うかどうかなんじゃねえの？」

楽しいとは、また明日、の明日が早く来ればいいと思うこと——。なんてわかりやすい。大輝の言葉は、いつだって「3」胸に落ちてくる。彼の目を通した世界というのは、自分が見ている世界に比べたら、ずっとシンプルに整理されていて、ずっと美しいんじゃないだろうか。

(中略)

駐車場のほうを見れば、お客のおじさんたちはちょうどそれぞれ軽トラやミニバンに乗って出ていくところだった。見送った航介と広志はすぐに入ってくるかと思いきや、隅の井戸のほうへ行ってまた何やら相談している。

「なんでお父さんも広志おじさんも、自分のやる事が何でもかんでもうまくいって信じられるんだろ。あんまり手放して期待すぎたら、駄目になっちゃった時のショックだって半端ないのに、ほんと強いなあって思う。どうして怖くないんだろ」

「うーん……」
大輝が、眉根に皺を寄せる。
「ふだんから（難しいこと考えんのは好きじゃない）と明言している
彼だけれど、それにしてもよくまあ、こちらのこういうぐるぐる
した思考に付き合ってくれている、と雪乃が思う。」

「ごめんね、ややこしいことばっか言って」

「や、それはいいんだけど……」

大輝が葉を取って、肘の虫刺されにもう一度塗り直す。メンソール
のすーすーする匂いと、蚊取り線香の甘苦い感じの匂いが入り混じる。

「うーん……」

「いいよ、もう」

「いや、俺さ、頭悪いからよくわかんないんだけど……つまり雪つべ
が言ってるのはさ、俺らが雪つべんちに遊びに行かなくなんのが怖い
ってことなわけ？」

「そっ……」

雪乃は絶句した。頬が、耳が、うなじが、みるみる火照ってゆく。

そんな取っつきやすい言葉を、そんなわかりやすい言葉で言いきらない
でほしい。シンプルにも限度がある。

「え、ごめん、やっぱり違うか」

謝られるとますます困る。

「……違って、ないけど」うつむいたまま、雪乃は言った。「デリ
カシーもないよね」

「げ。うー、ほんとごめん、それ俺の唯一の弱点」

しかたなく、雪乃はちよつとだけ笑った。⑤大輝ときたら、ほんと
うに大輝だ。

「けどさ、それがそうならさ。雪つべ、やり方間違ってるよ」

それなりの原因があるみたいなのを言ったりもするけど、そんなや
つらは片っ端から糞食らえだ』って。『いじめは、いじめる側が百パ
ーセント悪いによ』って

「広志おじさんが？」

「うん。俺もほんとそう思うよ。気の合わないやつがいるなら、自分
がつるまなきやいいだけじゃん。好きになれないやつを寄ってたかっ
ていじめるよか、勝手に他んどこで自分が楽しいことしてりゃそれで
いいじゃん。だろ？」

「う、うん……」

「俺さ、デ……デカ……ええと何だっけ、俺にないやつ」

「え？」

「さっき雪つべが俺にないよねって言ったやつ」

「デリカシー？」

「そう。それとかもよくわかんないし、頭もよくないけど、これだ
けはわかるよ。たとえば雪つべの側に、百歩、じゃなくて千歩ゆずっ
て、何かいじめられるような理由があったとしてもだよ。いや、一万
歩？ 百万、」

「いいから、その先」

「うん、ありえないけど、一億歩ゆずってそういう何かがあったとし
てもだよ。だからってそのことが、雪つべをいじめていい理由にはな
らねえっての。ふざけるなっつもの」

⑥雪乃は、なんだかぼうつとなつて大輝を見やった。

（もしかして大ちゃん、あたしのために怒ってくれているんだらう
か）

大輝が本気で怒ってるところを見るのは初めてだ。それが本人の問
題についてはなくて人のためだというのも⑦彼らしい。

「やり方って？」

「ていうか、言い方？ 遊びに来なくなんのが怖い、それはいやだっ
て思うなら、黙ってるんじゃないよ。『また来てね』って言えばいい
じゃん。『また明日ね』って。そのほうが伝わるし、言われた
ほうだって気持ちいいじゃん」

大輝の言うのは、たぶん正しい。けれど、そんな素直な言葉がする
すど口に出せるくらいなら、雪乃だって最初から苦労はしていいの
だ。

「やっぱり……大ちゃんにはわかんないんだよ」

大輝がむつとする。

「何がだよ」

「全部だよ」

雪乃は言い返した。

「毎日、うちから帰りに祠のとこまで一緒に行ってさ。モチオにごは
んあげてさ。そりゃ、すごく楽しいよ。だけど、『また明日ね』っ
て手を振って見送って、あんたたち四人の背中が道の向こうへ遠く
なっていく時、あたしがどんな気持ちでいるかなんてわかんないでしょ」

「わかんないよ、言ってくんなきゃ」

「一緒にいられる時間を楽しんで思ってる自分に、いちいちもう一
人あたしがお説教するんだよ。（明日もあの子たちが遊びに来るな
んでどうしてわかるの？）って。（前の学校でクラス全員が口きいて
くれなくなった時だって、前の日まではゼンゼン普通だったじゃない、
もう忘れたの？）って」

（中略）

「父さんがさ、雪つべのこと俺に話してた時に言ったんだ。『大人に
なってもバカなやつってのが世の中にはいて、いじめられるほうにも

（村山由佳「雪のなまえ」（徳間書店）より）

* 英理子おばさん：雪乃の母。仕事を諦めたくないので東京に残ったが、週末
は長野で過ごしている。

問一 1 3 にはあてはまる言葉として最も適切なものを次か
ら選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア すたとん イ すたすと ウ はつと

エ のびのびと オ きゅつと

問二 線①「雪乃は、急いで大輝のところへ行った」とあります
が、なぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えな
さい。

ア 詩織たちとの過ごし方に迷いが生じ、大輝に相談したかったか
ら。

イ 詩織たちの本音が気にかかり、大輝の意見を聞きたくったから。
ウ 詩織たちとのつきあいに嫌気が差し、大輝に助言を求めたかっ
たから。

エ 詩織たちに悪口を言われているのではないかと疑い、大輝に探
りを入れたかったから。

問三 線a「口を尖らせる」、b「地団駄を踏みたくなくなった」と
きの気持ちとして最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で
答えなさい。

ア 驚き イ 不満 ウ 苛立ち エ 心配 オ 哀しみ

問四 □(37行め)にあてはまる言葉を文章中から五字以内でぬき出して答えなさい。

問五 ー線②「全然わかんないよ」とありますが、何がわからないのですか。文章中の言葉を使って六十文字以内で答えなさい。

問六 ー線③「楽しいと感じることこそが不安なのだ」と雪乃が考えるのはなぜですか。次の文の□にあてはまる十七字の言葉を文章中から探し、はじめと終わりの五字をぬき出して答えなさい。

・雪乃には、前触れもなしに□十七字□という辛い体験があるから。

問七 ー線④「デリカシーもない」とは、大輝のどういうところを指しているのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 雪乃が触れてほしくないことを遠慮なしに指摘するところ。
- イ 雪乃が気にしていることを根掘り葉掘り聞いたところです。
- ウ 雪乃が認めたくないことを知っていながら話題にするところ。
- エ 雪乃が隠したいと思っていることを平然と言いつらすところ。

問八 ー線⑤「大輝ときたら、ほんとうに大輝だ」とありますが、このときの雪乃の気持ちの説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア デリカシーのないことを注意されても、いっこうに反省しようと思わない大輝にあきれている。

- イ ややこしい思考が苦手で、問題が生じたときには熟慮せずにすぐに行動に移しがちである。
- ウ 正義感が強く、世の中の不正についてはどんなに些細なことでも平静ではいられない。
- エ 友情に厚く、理不尽な仕打ちを友達を受けた場合、我がことのように受け止められる。

問十二 この文章に描かれた雪乃を説明したものと最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自信満々な父にも、名前の呼び方のような細かいことにこだわる大輝たちにも心を聞くことができず、東京での辛い体験からいまだに抜け出せていない。
- イ 以前の苦しい体験からくる苦悩を理解しない大輝に落胆もしたが、自分の欠点を進んで認める大輝の潔さに触れて、人とのつきあいに希望を持つようになった。
- ウ 前の学校で受けた心の傷は癒えることはなく、友人関係に自信を持っていないが、自分の心の動きや大輝たちとのやりとりを冷静に見つめることができる。
- エ デリカシーのない大輝とは衝突することはあっても、彼の大きな言動に励まされることは多く、前の学校でのいやな体験を克服しようと秘かに決意している。

イ デリカシーがないことを責められても、その意味さえわかからない大輝にがっかりしている。

ウ デリカシーがないことを非難されても、少しも明るさを失わぬ大輝を誇らしく思っている。

エ デリカシーのないことを指摘されても、それを率直に認めてしまいう大輝を憎めないでいる。

問九 ー線A「また明日ね」、B「また明日ね」を口にするときの気持ちとして最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 期待を照れずに述べることで相手の不安がなくなることを望んでいる。

イ 相手への期待がいつか裏切られることになるかもしれないと心配している。

ウ 短い言葉に託した自分の思いが相手に誤解されないかと危惧している。

エ 明るい言葉に隠された不安に相手が気づいてしまうことを恐れている。

オ 単純な言葉に込めた自分の思いが相手に伝わることを疑っていない。

問十 ー線⑥「雪乃は、なんだかぼうつとなって大輝を見やった」とありますが、このときの雪乃の気持ちを七十文字以内で答えなさい。

問十一 ー線⑦「彼らしい」とありますが、このときの大輝の説明

発展問題

◆ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校6年生の「まい」は冬休みに祖母の家に遊びに来ていた。祖母は日本人(まいの祖父)と結婚した英国人で、若い頃から日本に暮らしているの、流暢な日本語を話した。

「最初にこの家で冬を過したとき、寝る前におじいちゃんの枕元に置いておいたコップの水が凍りました」

朝食のとき、祖母は紅茶カップを手に微笑んでいた。

「ええ? 冷凍庫みたい」

「そう、天然の冷凍庫。ジュースは、外に置いておいたらシャーベツトになりますよ」

「うわあ……。そうか、そうだよねえ。冷凍庫と同じなんだもん。夏にそれができたらいいのにねえ」

私の頭の中は、シャーベツトという言葉でいっぱいになっていた。さぞかし目も輝いていたことだろう。

「そうね。でも、夏は暑い。暑いと外では氷はできないわけですよ」

祖母は相変わらず微笑みながらいったが、いくら幼かったとはいえ、私ももちろん、そんなことはわかっていた。祖母は本気で私を諭そうとしているのだろうか。それとも冗談なのだろうか。本気だとしたら、祖母は私がそんなこともわからないような子だと思っっているのか。私は心配になった。それで、① そつと、

「あのね、暑いと氷ができないことは知ってるよ」

と、小さくいつてみた。祖母はぶつと吹き出した。

「私も、まいがそれを知っているだろうとは思っていましたが」

ああ、じゃあ、やっぱり冗談だったんだ、と、私は安心し、そんなことにこだわった自分が恥ずかしくなった。

自分が相手にどう受け止められているのかということが、私はその頃、とても気になっていった。と同時に、そんなことを気にする自分が情けなかった。そういうことはばかり考えていると、つくづく自分が嫌になった。②私は卵立てのなかの、半熟の卵をぐるぐる回すと、かき回した。

祖母はその指先を見ながら、ゆつくりと、

「まいは、自分が相手によく思われたいではなくて、正しく理解されたいだけなのではないですか」

と、諭のなかからそつと糸を繰り出すようにいった。

祖母のこの姿勢——慎重に、デリケートなものを扱うようにことばを選び、相手に語りかける——、ときにはぎこちない日本語のように響きけれど、この姿勢は彼女の一生を通じて、少なくとも私に対しては、一貫したものであった。

どうして祖母はああいうことが、まるで日常の動作のように気負わずにできたのだろう。今も時折、こういうふうにいるとは思って不思議に思う。彼女にとって日本語が母語ではなかったせいだろうか。それゆえにことばとの間に緊張感があり——少なくとも、最後まで「*狎れ」は発生しなかった——情性でことばを流してしまうことをせず、いつもできるだけ正確を期していた。そして、ことばを投げかけて終わり、ではなく、そのことばを自分の意図するように相手にキヤッチしているかどうか、それを見届けようとしていた。祖母がやっていたのは、そういうことだったのだろうか。

ツツがどつしり入っている。それからミルクと半々に入れた熱い紅茶も。祖母は、私用にはいつも、温かいミルクをたっぷり入れた。「そうかなあ。あれだけ怒ってるってことは、案外すごく傷ついたりして」

私は、ミルクティーを一口飲んだ。

「私なら忘れられないだろうな、一度攻撃されたことは。私、けつこう傷つきやすいみたいなんだ」

④ほそつと付け足した。
思えば、私はここで、心理的に少し踏み出した。祖母の出方を窺っていたのだと思う。祖母はいつも私を受け入れてくれたが、リアルタイムの自分の切実な悩みに、どれほど祖母が向き合ってくれるか、私にはまだわからなかったのだ。

子どもは自分でも気づかずに、さりげなくそういう重い「試し」をする。大人は自分が試されていることになかなか気づかない。それでおぎなりの対応をしてしまう。ほんとうはその一瞬、自分の全力を賭して向き合わなければいけないときなのに。けれど、私の祖母は、そういうことがわかるひとだった。

祖母は黙って頷いていたが、ふと、

⑤「ああ、ケーキにクリームをかけましょう。ちよつと待ってね」

そういつて立ち上がり、卵籠のなかから卵を取り出すと、小さいボウルに割り入れ、かきほぐした。それから小鍋にミルクと砂糖とコーンスターチを全部いっしょに入れた。そしてくるくるかき回すと、火にかけ、更にかき回しながらほぐした卵を入れてゆく。また泡が立つ。バターを入れる。
そういう動作がすべて、途切れることなく、流れるように続くのを、

祖母にその声をかけられ、③私はハツとして顔を上げた。祖母は続ける。

「そうだとしたら、いちいち訂正したり、念を押したりすることも、意味のあることですよ」

なぜ彼女は、あのととき私の考えていることがわかったのか。私は心底驚いて、

「あのね、ほんとうは、そのことをちゃんといおうかどうかどうしようか、迷ったの」

うんうん、と微笑んで、彼女はもうそれ以上は何もいわなかった。

昼食後、祖母は公民館で村の人たちにフルーツケーキの作り方と簡単な英会話を教えるために出かけていった。ひとり留守番していた「まい」は、庭で雄鶏が雌鶏から獲物を横取りするのを見て憤慨し、帚の柄で雄鶏の尻をつついた。怒った雄鶏はものすごい勢いでまいを追いつ返し、まいは真剣に恐怖を感じながら家に逃げ込んだ。玄関のドアを閉めても恐怖は収まらず、雄鶏がどこから家に入り込んでくるのではないかと怯えていたまいは、帰ってきた祖母がドアを開けた瞬間、悲鳴を上げてしまう。驚く祖母にまいは事情を説明した。

「ああ、それで、雄鶏が前庭まで出てきていたのね。裏に行くようにいっておいだから、もう大丈夫ですよ」

「ほんとう？ あ、雄鶏、ずつと私のこと、つけ……狙わないかしら」

⑥「そこまで執念深くありませんよ。一晩眠ったら、いや、もう忘れてるでしょう、ニワトリってそういうもの。大丈夫、大丈夫」

祖母は私にケーキを差し出した。様々な種類のドライフルーツやナ

私はいつも、飽かず眺めていた。今でも目の前に浮かぶ。いつでも実況中継できるほどに。

祖母は火を止めてなお、鍋の中をかき混ぜながら、
「傷つくのは仕方がないです。まいはそういう『質』なのだから、そのことは諦めないで仕方がないです」

⑦ゆつくりと、自分のなかから紡ぎ出すようにいった。それを聞いて、私は顔を赤らめた。一瞬の戸惑いと反発と、それから、安心感。熱い湯船に浸かって、瞬間身体は緊張するけれど、じわじわと解きほぐされていくような安心感。このお湯は、自分の味方なんだ、緊張しなくていいんだという、全面降伏の安心感。

⑧そういう質だから、仕方がない、というのは、傷つくことなんかないようにもつと強くなれ、と励まされるのとは正反対の*ベクトルのことばだったが、不思議な説得力があった。どんなに頑張っても、自分が自分である限り、何かで傷つくんだろうな、という気がしていた。けれどそのとき、⑨祖母に、いわば引導を渡されたにもかかわらず、お先真っ暗、という絶望的な気分ではなく、むしろどこか明るい、という、自分の行き先にはのかな灯りがともったような明るい気分になっていた。祖母は続けてこういった。

「まいはかしこい子ですから、自分のことがわかる。これから先、どんな傷を負っても、その傷で、自分がすっかりだめになつてはしまわない、って確信があるでしょう」

⑩このことばは、私をまったく違う次元、自分の人生を一瞬にして*俯瞰する次元にもつていった。私はこのときまだ十二歳で、世間も知らず、すべてにおいて経験も足りなかったが、そういうことは関係なく、これからは自分には手痛いことが起こり続けるだろうこと、

それに自分がひとつひとつ、心身ともに傷つきながら悶わらざるをえなくなるだろうことを、真夜中の山野に雷が光って一瞬すべてが視界に入るように、把握したのだった。かなりのことが起こるだろう。身も心もズタズタになるようなことも。けれど、それが、私をすっかりだめにするのではないだろう。今までもそうであつたように。

私はどう応えていいのかわからず、黙っていた。祖母は、

「どんなことが起こっても、『こんなことは私の致命傷にはならない』って、自分に言い聞かせるんです。そうすれば、そのときはそう思えなくても、心と体のどこかに、むくむくと芽を出す、新しい生命力の種が生まれます」

「こんなことは私の致命傷にはならない。」

私にはこれまで、確かに致命的と思われるような出来事も起こつたけれど、そのたび私は、祖母の教えを忠実に守り、「こんなことは私の致命傷にはならない」と、まじないのように唱え続けてきた。起き上がることもできない日々が続いても、そのことばは、冬の午後の暖かい光のように、辛抱強く、凍え切つた大地に吸収されていったのだ。

こんなことで、自分がだめになることはない、決して。
こんなことで、あなたはだめにならない、決して。

「おばあちゃん、いばら姫の仙女みたい」

私は自分が教えられているばかりの状況に、反発する気分があつたのだから、それで何かの利いたことをいいたくなつたのだからと思ふ。ふっと、直感的に閃いた比喻をひけらかしたくなつた。

「いばら姫の仙女？」

く教えてくれるという確信がある。

ウ 頭が悪いとは思われていないだろうが、祖母に嫌われているのかもしれないと思うと心配になる。

エ 馬鹿にしないでと訴えたいが、祖母の謎めいた微笑みを見ると嫌な予感がしてためらつてしまふ。

問二 —— 線② 「私は卵立てのなかの、半熟の卵をぐるぐるとかき回した」とありますが、この「まい」の様子を見ているときの祖母の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人にどう受けとめられているのかということばかり気にする自分に情けなさを感じている「まい」を励ませずに、もどかしく思っている。

イ 他人の目に良く映りたいということしか考えられなくなつて自分のことを恥じ、反省している「まい」の精神的な成長を喜んでいる。

ウ 小さな「まい」が何かを思い悩み、苦しむ様子を見るのはつらいが、果たして自分が救いの手を差し伸べて良いものかどうか迷っている。

エ 人の目を意識し過ぎるあまり自信が持てず、自分の気持ちのまま、素直に振る舞えないことで悩んでいる「まい」の苦しみを察している。

問三 —— 線③ 「私はハツとして顔を上げた」とありますが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 気を抜いてぼーっとしていた時に、とつぜん祖母に声をかけられたから。

「ほら、いばら姫が生まれたとき、悪い仙女が呪いをかけるの。この子は十五になったら、*紡錘に指をさして死ぬ運命だ、って。それでみんな絶望するんだけど、最後に^①いい仙女がまじないをかけるの。私には、呪いを消す力はないけれど、それを少し変えることはできる。この子は、十五になったら紡錘に指をさして倒れ、そのまま死んだように眠つてしまふ。けれど、王子が現れて眠りから目覚めるだろうって」

「はあ、なるほど」

この比喻は、我ながら、的を射っていた。

祖母は、私の運命を言い当てたけれど、対処するおまじないも教えてくれた。自分がそばにいて励ますことができない未来に、この「生き難い」孫が、なんとか自力で生き延びていけるように。

【梨木香歩「冬の午後」(『西の魔女が死んだ 梨木香歩作品集』(新潮社)所収)より】

* 狎れ…親しくなりすぎてけじめがつかなくなった状態

* ベクトル…ここでは「方向性」の意

* 俯瞰…高いところから見下ろす

* 紡錘…糸をつむぐ道具

問一 —— 線① 「そっと、『あ、ね、暑いと氷ができないことは知ってるよ』と、小さくいつてみた」とありますが、このときの「まい」の気持ちや考えの説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 発言の真意を祖母に確かめてみたいが、そうすることが果たして適切なかどうか、自信がない。

イ 発言の意図をはかりかねて困惑しながらも、聞けば祖母は優しく

イ 沈黙に耐えかねた祖母が口にしたことばで、部屋の空気が一変したから。

ウ 自分では気がついていなかった「欠点」をストレートに指摘されたから。

エ 自分の悩みを言い当てられた上に、その本質までもが示されたから。

問四 —— 線④ 「ぼそっと付け足した」とありますが、「まい」がこのような言動に出たのはなぜですか。文章中の言葉を使って五十文字以内で説明しなさい。

問五 —— 線⑤ 「ああ、ケーキにクリームをかけましょう。ちょっと待っててね」とありますが、祖母がケーキにかけるクリームを作ろうと思つたのは「その方がおいしいから」ということ他に、どのような理由が考えられますか。簡潔に説明しなさい。

問六 —— 線⑥ 「ゆっくりと、自分のなかから紡ぎ出すようにいった」とありますが、これは祖母が大事なことを語るときの様子を表しています。

—— 大事なことを語るとき祖母の言葉は何にたとえられていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 雷 イ 糸

ウ 熱い湯 エ ミルク

2 大事なことを語るとき、祖母は決まって同じような姿勢、態度で臨みます。その様子を文章中の言葉を使って六十文字以内で説明しなさい。

問七 —— 線⑦ 「祖母に、いわば引導を渡されたにもかかわらず、

自分の行き先にほのかな灯りがともったような明るい気分になっていた」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 苦しみ、もがき続ける「まい」の訴えに気づいても動じることなく、冷静かつ的確なアドバイスを即座に考えることのできる祖母のことばには、豊富な人生経験を感じさせる不思議な説得力があったから。

イ 救いを求めてきた「まい」をあえて突き放し、諦めなさいと諭す祖母のことばには、もっと強くなって傷つかないようにすればよいという安易な励ましや同情の対極にある、真の優しさが感じられたから。

ウ 「まい」の切実な悩みを深く受けとめ、彼女が困難を乗り越えるために必要なことは何か、真剣に考えをめぐらせた上で導き出された祖母のことばからは、責任と愛の重みを感じられたから。

エ 自分の気持ちが変わらなくなってしまった「まい」に、今の状況を冷静に見つめ直すことを促す祖母のことばには、視野の狭さによって誤った判断をしてはならないという重い教訓が込められていたから。

問八 —— 線⑧ 「このことばは、私をまったく違う次元、自分の人生を一瞬にして俯瞰する次元にもっていった」とありますが、このときの「まい」の心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もし悪意にさらされ、深い傷を負わされたとしても、自分には支えてくれる祖母がいるのだという安心感が生きるエネルギーと

なって満ちあふれている。

イ 世間も知らず、経験も足りない自分が、心身ともに傷つきながらも、前を向いて自分の道を歩んでいかねばならないという運命を一瞬のうちに把握した。

ウ 人生の途中で心身ともに深い痛手を負ったとしても、自分はほどなく立ち直れることに気づき、自分の前途には明るい未来が広がっていると確信した。

エ 深刻なダメージから立ち直る力が、既に自分の内にそなわっていることを自覚したことで、自分は長い人生を生き抜くことができるという自信が生まれた。

問九 —— 線⑨ 「いい仙女がまじないをかけるの」とありますが、「まじ」がかけられた「まじない」を十七字でさがし、抜き出して答えなさい。なお、答えは一字一句ていねいに書くこと。誤字、脱字、雑な字は誤答と見なします。

問十 —— 線 「私の祖母は、そういうことがわかるひとだった」とありますが、「そういうことがわかるひとだった」祖母は、どのようなことを願いながら「まい」に向き合っていましたか。そのことがわかる一文をさがし、はじめの五字を抜き出して答えなさい。

イコールの関係③ 比喩

A⇨まるでBのようだ(比喩) ⇨イコールの関係

あるものとAをわかりやすく説明したり描写したりするために似ていることや具体的なことBに置き換えて表現することをAをBに「たとえる」(比喩)と言います。

例 A 太郎の頬はまるで B リンごのようだ。(イコールの関係)

⇨ふっくらとした、血色のよい太郎の頬から元気のよい健康な少年の姿を想像することができます。

Bは、Aについての叙述・描写ですから、A⇨Bと考えられます。

比喩法の復習 (5年下・第一回P.18・19参照)

1 直喩法(明喩法)

⇨「AはBのようだ」「BのようなA」「AはBみたいだ」「AはBのごとし」のように、比喩表現であることを明示する言葉をとまなう。

例 A 与作はまるで B 馬車馬のように働いた。

(与作は脇目も振らず一途に働いた。)

*馬車馬⇨馬車を引く馬は、前方しか見えないように目に覆いをされ、追い使われる。

2 隱喩法(暗喩法)

⇨比喩表現であることを明示する「ようだ」「に似ている」「ごとし」などの言葉を省き、A(たとえられる対象)とB(たとえるもの)とを直接結びつけた表現。

例 A 働く与作の姿は B 馬車馬だった。

3 擬人法

⇨人間でないものの様子や動きを人間の様子や動きに見立てる。

例 A 王の馬車を引く馬車馬は B 律儀な兵卒だった。

(王の命令に従い馬車馬が脇目も振らず一途に走ってゆく。)

4 比喩の解説

比喩表現にであったら

- ① 何を⇨A(たとえられる対象)⇨働く与作
何に⇨B(たとえるもの)⇨馬車馬
たとえているのか確認する
- ② A(たとえられる対象)とB(たとえるもの)との共通点
を考える(形か、色か、動きか、様子か、等々……)

比喩を越えて象徴・寓意へ

直接的には知覚できない概念・意味・価値などを、それを連想させる具体的な事物や感覚的にとらえることができるものによって間接的に表現する。(5年下第3回P.38)

象徴

例 象徴される抽象的な内容…平和
象徴する具体的なもの……ハト
「ハト」が「平和」を象徴

寓意

ある表現内容の文字とおりの意味ではなく、その表現内容から間接的に導くことができる、暗示された意味。「イソップ物語」における教訓が代表例。(5年下第13回P.142)

比喩・象徴・寓意は、筆者・作者の言いたいことの言い換えと見なすことができますから、筆者・作者の言いたいことと「イコールの関係」にあります。

問一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日常の言語活動における論理は、話の筋道といったごくインフォーマル(非公式なさま。略式であるさま。)なものである。どんな場合でも、言葉に筋道が通っていなければ、伝達は成立しやうがない。「筋」とか「筋道」とかいう語が示しているように言語に内在する論理性は何か、「線」のようなものと感じられているのが普通である。

表現の受け手はこの言葉の筋道をたどりながら理解を進めて行くわけだが、送り手との間の心理的関係の親疎によって筋道の性格も変わってくる。送り手と受け手が未知の間であるような場合、筋道はしっかりした線状をなしていて、受け手がそれから脱落しないようになってはならない。論理は密でなくてはならないのである。(中略)

相互によく理解し合っている人間同士の伝達においては言葉の筋道はつねに完全な線状である必要はないことが多い。要点は注目されるが、それ以外の部分はどうでもよい。等閑に付された(い

2 隱喩法(暗喩法)

⇨比喩表現であることを明示する「ようだ」「に似ている」「ごとし」などの言葉を省き、A(たとえられる対象)とB(たとえるもの)とを直接結びつけた表現。

例 A 働く与作の姿は B 馬車馬だった。

3 擬人法

⇨人間でないものの様子や動きを人間の様子や動きに見立てる。

例 A 王の馬車を引く馬車馬は B 律儀な兵卒だった。

(王の命令に従い馬車馬が脇目も振らず一途に走ってゆく。)

4 比喩の解説

比喩表現にであったら

- ① 何を⇨A(たとえられる対象)⇨働く与作
何に⇨B(たとえるもの)⇨馬車馬
たとえているのか確認する
- ② A(たとえられる対象)とB(たとえるもの)との共通点
を考える(形か、色か、動きか、様子か、等々……)

比喩を越えて象徴・寓意へ

直接的には知覚できない概念・意味・価値などを、それを連想させる具体的な事物や感覚的にとらえることができるものによって間接的に表現する。(5年下第3回P.38)

象徴

例 象徴される抽象的な内容…平和
象徴する具体的なもの……ハト
「ハト」が「平和」を象徴

問一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

- 1 線①「線」のようなもの」とは、何ですか。十字の言葉を抜き出して答えなさい。
- 2 線②「心理的関係の親疎によって筋道の性格も変わってくる」とは、どういうことですか。説明しなさい。なお、「親疎」とは、「親しいことと疎遠なこと。親しい間柄とあまり付き合いない間柄」という意味です。
- 3 A・B にあてはまる言葉を文章中から抜き出して、それぞれ答えなさい。

もつとも、自分はその通りにやっているし、効果もあげている、という立派な方も居られるが、そこまで立派な方は人間を通りこして、①既にホトケになって居られるのだらう。ホトケに「このろの処方箋」など不要なのはもちろんである。実際、いつどこでも誰にでも通じる正しいことのみを生きていては、「個人」が生きていると言えるのかどうか疑わしい。それは②既にホトケになっている。(河合肇雄「このころの処方箋」より)

- 1 線①とは、どういうことですか。説明しなさい。
- 2 線②とは、どういうことですか。説明しなさい。